



中国唐山の無形文化遺産 パフォーマンスである「鉄花打ち」

中国の首都として、北京は海外からの観光客にとって欠かせない旅行先です。北京周辺の観光では、唐山は優れた選択となります。北京から出発すれば、長距離の旅をする必要はなく、車でたった1～2時間で、歴史の雰囲気と独特な民俗が溶け合う唐山に到着できます。そして、唐山の様々な観光体験プログラムの中で、「鉄花打ち」は間違いなく見逃せないクライマックスのショーです。

夕暮れに包まれた唐山・河頭老街の運河の上で、勇壮なメロディーが夜空にこだまするのに伴い、職人たちは溶鉄をすくい上げ、力強く夜空に振りかけます。その溶鉄が天の川のように高く舞い上がった瞬間、木槌が一気に振り下ろされ、摂氏1600度の熱い溶鉄が夜空の中で打ち散らされます。「ドスン」という低い音と共に溶鉄が空中で炸裂し、金色の火の粉が瞬く間に一輪輪の大きな金花となり、まるで金色の流星群が夜空全体を照らし上げるように、壮観な光景が広がります。盛唐風

の古建筑群や「鳳凰天翔け」などのパフォーマンスが添えられ、観光客は目を飽かす視覚の盛宴を楽しむことができます。これが、唐山が誇る「鉄花打ち」の圧巻の奇観です。

この圧倒的な迫力を持つパフォーマンスには、千年以上の歴史があります。鉄花打ちは「鉄水打ち」「鉄水花火」とも呼ばれ、北宋時代に始まりました。その起源は、製鉄の職人たちが祭りをを行い福を祈る儀式でした。中国の伝統文化では、鉄は陽気に満ちたものとされ、邪気を払い災いを避ける力があると考えられています。夜空に散る鉄花は、さらに「あちこちで金が生まれる」という象徴であり、人々の豊作と豊かさへの願いが込められています。そのため、溶鉄を空に打ち上げることで、炉の火が旺々と燃え、事業が順調に発展することを祈ります。明・清時代になると、この鉄花打ちは徐々に祝祭行事の重要な一環として発展しました。伝えによれば、鉄花打ちは悪霊を追い払い邪気を除くことがで



溶鉄が空中に投げ上げられています



溶鉄は打たれて鉄の花になっています

き、鉄花打ちを観賞する人も体についた邪気を取り除くことができると信じられています。そのため、古くから鉄花打ちは人気の高い民間娯楽パフォーマンスとして受け入れられてきました。

ただし、鉄花打ちは極めつけの手打ち技術が要求され、習得難易度は非常に高いです。通常、鉄花打ちの練習は「水打ち」から始まります。水は溶鉄の形によく似ているため、弟子たちの練習は最初1メートル、次に3メートル、その後5メートルと距離を伸ばし、最終的に水を10数メートルの高さまで打ち上げられるようになったら、力のコントロールが合格と認められます。練習では力だけでなく、命中精度も鍛えなければなりません。鉄を陶器の炉に入れ、炭を絶えず燃やし続け、鉄が溶けて液体になるまで加熱します。スコップですくい上げたばかりの溶鉄の温度は摂氏1600度～1700度と非常に高いため、パフォーマーは打ち込む際に格外的な注意が必要です。もし打ち込む位置が不正確だったり力が不足したりすると、鉄花が一定の角度と高さには達せず、火傷する危険性が非常に高くなります。練習初期に火傷するのはよくあることです。さらに、溶鉄の温度が足りない場合、溶鉄が十分に飛び散らず、金花も逆らないだけでなく、万一観客にかかった場合、結果は計り知れません。そのため、千余年の間、こ

の技芸は鍛冶屋や銅細工職人の間でだけ伝えられてきました。鉄花打ちのパフォーマーは、いずれも経験豊富で度胸のある腕利きです。飛び散る鉄花による火傷を防ぐため、職人たちはパフォーマンス時につばの広い帽子をかぶり、上半身を裸にして臨みます。これは、鉄花の火の粉が衣服に落ちると急速に広がるのに対し、肌に落ちた場合は弾き落とされるからです。また、このような理由から、パフォーマーたちの体はほとんど傷だらけになります。

現在、この千年の歴史を刻む技芸は、国家級無形文化遺産として保護されるだけでなく、中国伝統の「匠心」と民俗の精髓を伝える核心的シンボルとなり、世界中の観光客の関心を集めています。

筆者紹介



楊敏（ヨウ・ビン）

中国の弁理士・弁護士。現在GIP China所属。中国海洋大学にて応用化学を専攻とし、2010年より知的財産権分野のキャリアを開始し、2019年に中国司法試験（法律職業資格試験）に合格した。材料・冶金・半導体分野における特許出願、中間処理、拒絶査定不服審判、無効審判、権利侵害分析、訴訟等関連業務を担当する。



【参考】www.unitedgips.com